

者供養に導入しているだけではないか、という批判も成り立つ。グリーフケアには死者の再配置という考え方があり、死者と共に生きることによって生きる力を回復させる、という視座が確かにある。しかし、グリーフケアと死者からの回向供養との根本的な差異は、死者の位置づけである。グリーフケアの場合、死者は生者の世界を引きずっているが、死者からの回向供養においては、死者は礼拝と尊敬の対象であり、仏の世界からの慈悲のはたらきなのである。

葬式や法要は、死者と濃密に関わる場であり、死者と生者が協同する場である。それは死者を供養するという形をとりながら、実際には、死者によって生者が供養されている場である。そのことの意義を確認することによって、死者供養の捉え方は大きく転換するであろう。とりわけ僧侶にとっては、死者を礼拝と尊敬の対象とすることで、死者が仏の世界からの慈悲のはたらきとなること、それゆえに、遺された生者が死者と向き合うことで、仏の世界へと導かれる契機となることを自覚しつつ、葬式や法要に臨むことが大切ではないか。この辺りに、死者と協同する仏教が開かれる可能性があると思うのである。

仏教看護のめざすもの

藤 腹 明 子

「仏教看護」を標榜する看護者の立場から、仏教看護のめざしているものが、宗教の社会貢献、対象の霊的側面のケアに何

らかの意味をもつものであることについて述べたい。

一 看護と宗教

看護を実践するうえで、宗教に関することを視野に入れる必要性がある理由については、次の五点を挙げたい。それは看護が、人間が人間にかかわる仕事であるということ、人間の「生老病死」という生命(いのち)の営みにかかわる仕事であるということ、人間の誕生前から死後までも視野に入れた仕事であるということ、科学や人間の力では解決できないこともあり得る仕事であるということ、癒しや救いにかかわる事が問われる場合があり得る仕事であるということ、等である。看護を実践するうえで、時には、科学では解決できない事がらへの対応が求められるという点において、看護における宗教的視座は大切である。

二 臨床現場におけるスピリチュアルな側面の問題

医療現場では、末期患者やその家族の体験する苦しみを「身体的」「精神的」「社会的」「スピリチュアル」の四つの側面からとらえ、ケアをしていこうとするのが一般的である。現場におけるスピリチュアルな事がら、疑問、苦しみについては、次の六項目にまとめることができる。つまり、この世に生を受け、存在することの意味に関すること、生きる意味・目的・価値に関すること、病気体験・苦難の意味に関すること、死や死後、来世に対する不安・恐怖に関すること、宗教的疑問、罪の意識に関すること、生まれ変わりへの関心・期待に関すること、等である。看護が、患者や病人、その家族のこのような事がらについての疑問や苦しみに対峙し、対象自らがその答えを

見出していけるようにかかわらねばならない仕事であるという点において、仏教看護は霊的側面の対応を重視している。

三 仏教看護であることの意味

では、なぜ新しい科学的看護の可能性を「仏教看護」に求めるのかといえば、その理由の一つは、日本の看護の歴史は仏教を抜きにしては語れないからである。少なくとも日本の看護は仏教の精神、すなわち慈悲の心を基として、病人や貧しい人々を世話することから始まっており、さらには時代を越えて看護と仏教の結びつきを期待した人たちがいたということである。

二つ目の理由は、より日本的な看護を追及したいという点にある。何故ならば、看護の在り方にも、その国の文化、宗教、国民性、歴史、風俗・習慣などが反映されるものであり、日本における看護には、日本および日本人の諸々の特質が反映されるものであるからである。もちろん、看護の対象は人間であり、看護の本質においては万国に共通する面も多くある。仏教看護では、そのことを認識したうえで、さらにわが国にふさわしい個性と独自性をもった看護を考えることをめざしている。

四 仏教看護の本質

仏教看護の本質を理論化し、具体的な方法論にまで言及したものが「仏教看護論」である。仏教看護では、仏教の教えや価値観を看護の基本的な考え方や実際に取り込んでおり、それは、看護の主体、対象の双方に対して意味をもつものであると考えている。また仏教看護では、看護する側、される側の生死観を大切にしている。生死観は霊的側面のニーズに大きく影響

するからである。

以上、述べてきたようなことから、仏教看護のめざしているものは宗教の社会貢献、とりわけ霊的側面の事がらにかかわっていける可能性を秘めているものと考ええる。

パネルの主旨とまとめ

戸田 游 晏

総論に代えて戸田は、寺族の一人として、日本仏教に向けられる眼差しへの問い返しを試みた。六甲山麓の生家寺院の暮しでは、民俗学に謂う「山の怪」と日常が交わり、朝夕のお勤めで天地国家から親族一同に至る安寧と幸福が祈念されていた。これらを、どのような枠組から語ればよいのか、そもそも語る術はないのか。三・一一を機に、日本の仏教をはじめ宗教そのもの、これを考究する立場にも、一層の変革が求められるだろう。歴史と集団の記憶に蓄えられた智慧に再び活力を与える余地があるのではないかと問うた。

日本の仏教者が歴史的に果たした主な職掌に、祈禱と死者供養そして医療がある。

東大寺修二会は、一二六〇年の間途絶えることなき不退の行法と謂われる、民と国土の安泰を祈願する儀礼であり、練行衆と呼ばれる僧侶らが身を献じ、諸々の修法が行ぜられる。平岡が本年、練行衆を司る大導師を務めていた修二会の期間中、東日本大震災が発災した。これにあたり急遽祈願のなかに、事態